

「第16回 全国ジュニア・ラグビーフットボール大会」の優秀選手の選考について

[実施要項](#) | [組合せ/結果](#) | [総評](#) | [優秀選手選考](#)

1. 趣旨・目的:

本大会の選手育成と競技力向上を図ることを前提に、選手の競技力等の実態調査と優秀選手を発掘することを目的とし、選考した選手を発表・表彰することによって以下のとおり当該選手・関係指導者の方々のモチベーション高揚の一助とする。

- (1) 中学生選手のモチベーション向上
- (2) U15 選出から来る中学生世代の指導者への日本ラグビーへの関わりへの意識向上
- (3) 将来的な、U15 世代を含む一貫指導体制構築とセクターシステムの整備を視野に入れる。

2. 選考方法

大会期間中の試合でのパフォーマンスを普及・競技力向上委員会の競技力向上部門及び中学生部門がチェックし、検証、検討の上、優秀選手を選考する。

3. 選考基準

選考基準は、現時点で精神・身体(運動)能力と競技能力を有しており、且つ、同大会においてベストパフォーマンスを示した選手とする。

注 1: 原則的には特別にはポジションに拘らずに本大会のパフォーマンスを優先する。

注 2: 同時にセブンズアカデミーの選考基準などに基づいた将来性を加味する。

注 3: また、将来の成長が望め素養のある選手発掘の一助することを目的に、精神的、身体・運動能力等の潜在能力の高い選手についての調査を実施する。

4. 選考対象と選考人数

当該大会に出場しているチームの選手を選考対象とする。原則として 22 名とする。

(但し、これに満たない場合、或いはそれを超える場合もあることを想定する。)

5. 選考結果

下記の 24 名の選手を選出した。

	チーム名	選手名	所属チーム	学年	ポジション	身長	体重
1	大阪府中学校選抜	本田 晋太郎	岬町立岬中学校	3	LO	183	82
2		野中 翔平	東海大学付属仰星高等学校中等部	3	NO.8	181	75
3		北林 佑介	岬町立岬中学校	3	SO	171	77
4		高橋 慶大	東大阪市立小阪中学校	3	WTB	173	78
5	福岡県選抜	鶴田 馨	つくしヤングラガーズ	3	SO	175	66
6		東川 寛史	つくしヤングラガーズ	3	CTB	174	74

7	長崎県選抜	岩永 健太郎	長崎ラグビースクール	3	PR	169	70
8		前田 土芽	長与ヤングラガーズ	2	LO	173	70
9		古田 凌	亀岡市立亀岡中学校	3	PR	181	86
10	京都府中学校選抜	小鉢 竜太郎	京都市立洛南中学校	3	HO	163	70
11		北村 洋介	京都市立洛南中学校	3	CTB	173	65
12		吉田 陸央	京都市立洛南中学校	3	WTB	167	54
13	神奈川県スクール選抜	増田 智佳朗	田園ラグビースクール	3	LO	177	80
14	東京都中学校選抜	大貫 豪斗	國學院大學久我山中学校	3	LO	167	66
15		伊藤 大地	世田谷区千歳中学校	3	FB	168	62
16	奈良県中学校選抜	水野 健	天理中学校	3	PR	178	95
17		君塚 祐也	天理中学校	3	PR	177	80
18	愛知県中学校選抜	牛丸 直樹	名古屋市立北陵中学校	3	PR	172	76
19	群馬県スクール選抜	堀越 康介	高崎ラグビースクール	3	PR	175	98
20	東京都スクール選抜	佐々木 敬太	昭島RS	3	LO	175	74
21		山田 雄大	ワセダクラブ	3	CTB	170	62
22	大阪府スクール選抜	竹中 太一	岬ラグビースクール	3	SH	164	55
23		米村 龍二	豊中ラグビースクール	3	SO	173	63
24		岸本 雄介	大阪ラグビースクール	3	WTB	174	78

第16回全国ジュニア・ラグビーフットボール大会 優秀選手 総評

(財)日本ラグビーフットボール協会
コーチングディレクター 中竹 竜二

全てのチームがそれぞれの特色を活かし、且つ、全ての選手が自らのスタイルを持って、果敢にチャレンジし、全力で闘ってくれたことに、日本ラグビーフットボール協会として敬意を表したいと思う。

特に、フロント、スタンドフ、センターに体格的、身体的、技術的、リーダーシップの点においても、レベルの高い選手が多く、将来の日本代表を担う可能性を強く感じた。

試合の内容に関しては、多くのチームが、そうしたチームのキーマンに頼りがちなゲームメイクになってしまったような印象を受けた。特に、ゴール前でのチャンスどころの攻撃では、キーマンが一人二役を演じるような場面が多くみられた。そのため、ボールを持つ選手に偏りがうまれ、スピーディーでダイナミックなアタックへと発展する機会が少なかった。

一方で、優勝した京都選抜チームは、少数のキーマンに頼ることなく、ひとりひとりのディフェンスの意識の高さや敵ボールをターンオーバーした後の反応の早さ、展開の早さで、他チームを上回り、チームの総合力を武器に、勝利をおさめることができた稀なチームであった。指導者のコーチングの成果といえるだろう。

選手のパフォーマンスにおいては、スピードや俊敏性を活かした「はやい」プレーは随所にみることができた。しかし「低い」プレーに関しては、まだまだ改善の余地が残されているだろう。特に、タックル、モールやラックに入る際に、身体が浮いてしまう選手も少なくなかった。また、いくつかのチームでは素早いパスを活かした華麗なラインアタックも見られたが、全体的には、片手でボールを持つ選手が多く、ノックオンを含めたハンドリングミスが多かった。今後、日本ラグビーが、日本協会が提示している「日本スタイル＝4H(はやく、ひくく、はげしく、はしりかつ)」を体現するためには、上記のような個々人の基本スキルの習得が重要課題となる。

日本ラグビーの将来を担うジュニアラグビーでは、今後も、選手はよりハードルの高い挑戦を怠らず、指導者は選手の可能性を最大限に広げるためのコーチングを行うことを強く期待したい。

(2011.1.24)

[▲ ページトップへ](#)